

洗練された 大人のおとぎ話 11 ミュージカルの踊る宝石たち

エッセイスト 岩田 裕子

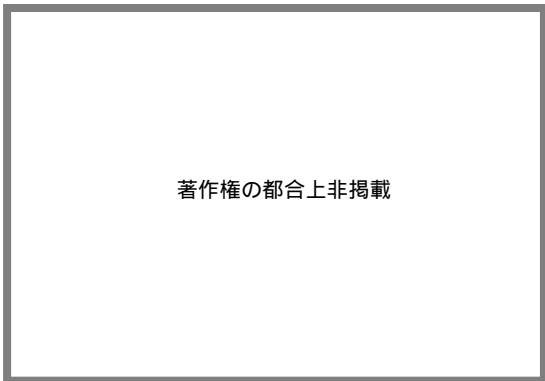
ミュージカルは、映画界に芳醇な香りを放つ大輪の花。とりわけ、50年代、60年代の映画は、たとえ深刻な内容を扱っていても、華やかで、幸せなオーラをふりまいている。

そのたとえで言えば、宝石は、花の蜜だ。ミュージカルに登場する宝石たちは、上質の甘さと華やかな魅力で、観客という気まぐれなミツバチをとらえて放さないのだ。

宝石の選び方をレクチャーしてくれる映画がある。1958年に、公開された「恋のてほどき」。原題「ジジ」である。ヒロインのジジ(レスリー・キャロン)は、天真爛漫で、元気いっぱいの少女。かつて、富豪の愛人だった祖母に育てられている。彼女の友達に、大富豪の独身貴族ガストンがいた。恋が仕事みたいなガストンは、その虚飾の世界に疲れ果てると、ジジの家を訪れ、少女を相手に子供みたいにはしゃぐのだった。ジジにとってのガストンは、おいしいお菓子を持ってきてくれる気の置けない兄みみたいな存在。しかし、祖母の思惑は違った。将来は、ジジをガストンの愛人にしたいのだ。お金もないし、育ちもほめられたものではない。彼女たちの価値観では、それが一番の出世の道だった。祖母の姉は、愛人として成功し、今は執事つきの邸宅で優雅に老後を過ごしている。彼女を見習わせたい。週一回、ジジはその大伯母の家にレッスンに通わせられる。淑女になるためのレッスン。といえは聞こえはいいが、結局は大富豪に見初められ、その愛人になるためのレッスンだ。

ある日のレッスンは、代表的な野鳥料理、ホオジロの食べ方。無作法は、身を滅ぼす元、と大伯母はいう。そして、葉巻の選び方。吸い方ではない。紳士のために、よい葉巻を選んであげられるのが、よい愛人の条件なのである。次に、宝石の見分け方。「宝石の知識がないのは、女性失格よ、大伯母の口癖なのだ。あるマダムは、素敵な黒真珠のネックレスをしていたが、それは、まがい物だという。恋人の愛がさめているのに、本人はまだ気づいていないというわけだ。

大伯母は、自身の宝石箱を見せ、一つ一つ宝石を取り出しては、ジジに種類を当てさせる。輝きのよい黄色い石に、ジジは「トパーズ」と答えたが、それは、最高級のイエローダイヤモンドだった。ア



著作権の都合上非掲載

「恋の手ほどき」1958年アメリカ
監督：ヴィンセント・ミネリ 主演：レスリー・キャロン
モーリス・シュヴァリエ ルイ・ジュールダン
ハーミオン・ジンゴールド
写真提供「財団法人 川喜多記念映画文化財団」

ーモンド形のダイヤモンドに、ジジがマーキース、と答えると、マーキースシェイプと直された。そして、極上のエメラルド。「緑色の光の奥に青い炎がみえるでしょ。青い炎は最高のものにしかないの」王様にもらったのだという。「立派な王様？」ジジの質問に「いいえ、立派な王様はくれないわ。贈る必要がないもの」と、大伯母の答えはなかなかブラックだ。「くれるのは、照れ屋、威張りや、成金さん。でも、誰でもかまわないわ。二級品を身に着けなければいいの。妥協してはだめ。一流の宝石をプレゼントされるまで、待たなければいけないのよ」なんて実践的なレッスン。それからジジの顔を観察し、「鼻と口はどうしようもない。でも、目とまつげと白い歯。それで何とか補えるわ」今もモデルやタレントなど、外見のプロは、こんなふうにくるに、容姿を採点されるのだろう。愛人という職業も、またプロなのだ。大伯母は、その職業に誇りを持っている。

ある日、ジジは、にぎやかな子供から、可憐な美女に変身する。驚くガストン。ジジは、みごとに、大富豪の愛人の座を射止める。そして、愛人デビューの日。美しく着飾ったジジを連れ、流行りのレストランに出向くガストン。大伯母様に教わったとおり、理想的な愛人を演じることができたジジ。しかし、ガストンはそれが耐えられなかった。あの、陽気で率直なジジが、権謀術数に彩られた社交界の仇花となっていくのが、ガストンは気づいた。ジジを本当に愛していると…。

モーリス・シュバリエが、放蕩紳士を優雅で粹に演じている。まるでロートレ

ックの絵の世界そのままのような、ベルエポックの美術がみどころだ。第一級とはいえないが、楽しめる作品となっている。

ところで、この物語は、もともと「ジジ」という舞台を映画化したものである。舞台で初代のジジを演じたのは、かのオードリー・ヘプバーンだった。

原作者であるコレット女史が、ヒロイン選びに、困り果てていたとき、そのまえを、見たことも



著作権の都合上非掲載

「マイ・フェア・レディ」1964年アメリカ
監督：ジョージ・キューカー 主演：レックス・ハリスン
オードリー・ヘプバーン スタンリー・ハローウェイ
写真提供「財団法人 川喜多記念映画文化財団」

ないほど、個性的な少女が走り抜けた。ある映画の端役として、花嫁姿で走っていた、まだ無名のオードリーだった。

「私のジジが走ってるわ」コレット女史は叫んだという。オードリーはジジ役で、世界にデビュー。その舞台を見た監督ウィリアム・ワイラーが、映画「ローマの休日」の王女役に抜擢。オードリーは、たちまち大スターとなった。

1年後、彼女もまたミュージカルに主演している。「マイフェアレディ(1964年)」である。ヒロインは、最下層の汚い花売り娘イライザ。ひょんなことから、言語学者ヒギンズ教授の家に住み込み、そのコクニー訛りを直され、王族の舞踏会に出席するまでになる。くしくもジジと同じく、レディになるための勉強にいそしむのだ。

レッスンが進み、訛りが矯正されるにつれ、服装がよくなり、きれいになっていくさまが、興味深い。優雅になると同時に、人格的にも、成長していく。

その成果は、社交界でも第一級の舞踏会で証明された。

ヒギンズ教授により、エスコートされ

著作権の都合上非掲載

に乗って、子供たちが登場するシーンが楽しい。個性が描き分けられているのだ。甘えんぼ、いたずらっ子、好奇心の強い子・・・そして、威厳ある15歳の皇太子チュラロンコン。帝王学を学んでいることが一目でわかる。自然にアンナが、最敬礼する姿もこのまじい。怖そうな王様が、どれほど子供たちに愛されているかも垣間見られる。その他、数多くの后たちとの交流や、第一夫人との信頼関係も描かれ、この映画の厚みとなっている。

王を演じたユル・プリンナーは、オーディションで選ばれた。

威厳があり、チャーミングな王である。上質なタイシルクでできた美しい衣装。はだけた胸のたくましさ。存在感が際立っている。

圧巻は、イギリスの有力者を招いた晩餐会だ。劇中劇「アンクルトムの小屋」のエキゾチックな舞台の完成度。この劇はウエストサイド物語の監督、ジェロームロピンスが振り付けなのだ。

無事、お開きとなってから、立派に晩餐会を取り仕切ったアンナに、王は、褒美として、いつも小指にはめていた大粒のエメラルドを抜き取って贈る。常に身につけていた指輪なだけに、その意味は大きい。アンナはそれを受け取り、人差し指にはめた。そのまま、二人で踊るシャル・ウィ・ダンスの楽しさ。初めて男と女を意識した二人。

その後、ビルマの使者と駆け落ちした側女が、王に鞭打たれようとしたとき、アンナは耐え難く、指輪を、王に返してしまう。しかし王の死の床で、エメラルドの指輪は再び、アンナに贈られるのだ。明るく、しかし、はっきり意見を主張するアンナは、つねに全知全能でなければならず、孤独だった王が、初めて得た対等の友人だった。そんな感謝の証なのか、それとも、男から女へ、愛の証として贈られたのか。その微妙さが心地よい。

ちなみにジョディ・フォスター版もチヨウ・ユンファに指輪を贈られる。タイシルク製の宝石箱から、ダイヤモンドの指輪が現れた。小粒のダイヤモンドを花の形にかたどった、現代的なデザインだった。ジョディはこれを受け取らない。亡くなった夫を忘れていないからだ、と王は指摘し、話はアンナの精神的な傷に及ぶ。新作のほうの指輪が、19世紀半ばのものには見えなかったのに比べ、「王様と私」の場合は、指の幅からはみ出そうなほど、大きなひとつ石だ。こちらのほうが、時代を考えれば、自然ではないだろうか。「王様と私」は実在の物語で、

タイのラーマ4世モンクット王と彼の子供たちのもとで家庭教師をしたアンナ・レオノウエルズの日記をもとに作られている。ラーマ4世は、アジアの国々が、イギリスなどヨーロッパの列強に侵略されていく時代、タイを守り抜いた王なのだ。

15歳であとを継いだチュラロンコン王子、のちのラーマ5世は、名君として知られ、奴隷制を廃止した。映画では、アンナの影響とされている。

噴水に彩られた宮廷の庭で、ビルマから贈られた奴隷のタブティムが恋人と語り合うシーンも幻想的だった。



岩田 裕子(いわた ひろこ)
東京都新宿区生まれ。慶應義塾大学文学部卒業(西洋史専攻)編集者を経て、少女雑誌、ファッション誌などに記事を執筆。現在は、宝石・妖精のエッセイストとして活躍している。

<http://www.geocities.jp/yamaneko1313/index.html>
(作品の紹介や日記も公開していますので、気軽に立ち寄りください。)

岩田 裕子 著

妖精のレッスン



エー・ジー出版 定価1,579円(税込)

今どきの妖精ジジが、迷える女性たちへ「自由な生き方」をレッスン。もっと気ままに、もっと自分らしく生きたいあなたに、500のレシピを教えてください。

ジジは、花のドレスよりダナ・キャランが大好き。朝からサンパを聞いてお風呂に入ったり、南極の海でデートしたり...。親友の春風ほのかは、彼女の影響ですてきに変身していきます。宝石、ファッション、恋の必勝法など、妖精気分ですてき方法がいっぱい。

アンアンなどで活躍する飯田淳さんの妖精イラストがキュートです。

「王様と私」1956年アメリカ
監督:ウォルター・ラング 主演:ユル・プリンナー デボラ・カー
リタ・モレノ マーティン・ベンソン
写真提供「財団法人 川喜多記念映画文化財団」

ドレスをまとい、ダイヤモンドのパリュールを煌めかせて、それはそれは美しかった。イライザは、皇太子にダンスを申し込まれた。人々は噂する。あれは、ハンガリーの王女だと。舞踏会デビューは大成功に終わり、ヒギンズは大喜び。その様子を見たイライザは、自分の人格がまったく無視されているのに気づき、この家を出て行く決心をする。胸元のまばゆいダイヤモンドがいくら似合っていたとしても、所詮は、宝石店からの借り物。すべてははずして教授に返し、唯一自分のものといえる、教授から贈られた指輪もはずして投げつける。女嫌いで、独身主義のヒギンズだが、イライザを失って初めて感じる寂しさをどうすることもできない。彼もまた、人を愛することを知り、人間的に成長したのである。

この2作はいわば、階級差がテーマといえるが、1956年に公開された映画「王様と私」は、東洋と西洋の差違の物語となっている。

1998年には、チヨウ・ユンファとジョディ・フォスターにより、再映画化された。「アンナと王様」と題されたこちらの映画は、ミュージカルではない。その後、「王様と私」を再見し、古さを感じるかと思っただ、それどころではなかった。「アンナと王様」も良くできた映画だったかもしれないが、「王様と私」は、すばらしかった。

1862年、デボラ・カー扮するアンナが、王の子供たちの家庭教師として、タイに赴任するところから物語は始まる。息子とふたり、遠い異国に来て心細いアンナだが、やさしさとユーモア、そして勇気で、この地に溶け込んでいく。

古い映画であるにもかかわらず、宮廷シーンの美しさに、ため息がでる。音楽